

## “Cogito” とその確実性

文学科四年 川村民雄

デカルトの懐疑は、哲学史の知識によれば、方法的と、特に規定される懐疑であり、そこに彼の懐疑の特色がある。デカルトの懐疑について、それだから、分析が試みられるとき、方法的であるとはどのようなことか、まず、明らかにされなければならない。

方法とは、単純化すれば、或る状況から他の状況へ移行するときのプロセスであり、日常的な意味からすれば、出発点から目的地へ到達するときのプロセスであって、そこから、機能概念であることが知られる。実体的にとらえられる両端についてではなく、一方の端からどのように変化して他方の端へ達するかのプロセスについて考えられるのが機能概念のだから。方法は、とすれば、二つの契機、即ち作用するものと作用をうけるものによって規定されることになる。作用するものが作用されるものに作用する仕方が方法であり、方法は、そのように考えられることから、機能概念として把握されなければならない。方法的であることは、そこから、二つの契機によって限定されること、その限定内において制約をうけることである。

デカルトの懐疑が対象としているのは彼が「実生活」と名づけるものではない。彼は、彼の懐疑を、「真理の探求」においてのみ使用しようとするのであり、前者を対象として使用してはならないことを強く注意している。懐疑の対象がそのように限定されることから、日常的な「実生活」とは区別される領域、即ちデカルトの意識内容と考えられる領域を、彼は、対象としていることが知られる。「学的な理論的な領域」が対象とされているのであって、「信仰や実践倫理」、「現実の生」ではない。この領域が、方法を規定する二つの契機の一つ、即ち作用をうけるものである。

デカルトが、まず、彼の懐疑の対象とする感覚は、「感官の知覚」であり、「物それ自体」と、一般的に、よばれるようなものではない。彼は、少なくとも、「物それ自体」とよばれるようなものについては言及していない。“choses”について、彼は、「感覚がわれわれの心に描かせるようなもの」として言及しているが、ことを換えれば、感覚によってわれわれの心に成立する範囲内で、“choses”が言及されているのであって、“choses”は、そこから、「客観的な実在」等々と、一般的に、される在り方ではなく、観念の一つの種類と

されなければならぬ在り方を、デカルトにおいては、しているのである。彼が感覚を懐疑の対象とするとき、感覚とそれに対する実在との連関を彼は対象としているのではなく、或る個別的な感覚と他の個別的な感覚との連関を対象としているのである。錯覚を、人は、感覚がわれわれを欺く事例の一つとする。錯覚は、だが、或る個別的な感覚とそれに対応する実在との不一致から錯覚とされるのではない。錯覚は複数の個別的な感覚によって構成されているが、構成要素である各々の感覚が、全体として、統一的、整合的には構成されていないことによつて錯覚が成立する。個別的な感覚の各々が整合的には構成されないこと、全体的な感覚としては整合性がえられないことに、デカルトは、彼の懐疑をかけるのであり、それによつて、彼は、感覚を全体として投げ捨てるのである。

デカルトは、次に、幾何学を懐疑の対象とする。幾何学を、彼は、演繹的な推理によつて系統的な体系を構成することが可能な学問としていふと考えられるが、それは、これを換言すると、有制限の公理と規則とを土台として整合的な体系の構成が可能なことであり、整合性が成立しないことによつて感覚が投げ捨てられたとき、感覚においては否定された整合性が成立している幾何学を、デカルトは、次に彼の懐疑の対象とするのである。整合性は成立すると思われるが、それは実際に成立しているのか、整合性が成立していることの検証はどのようにして可能なかを考えるとき、感覚が疑われた意味では確実な幾何学をも、彼は、彼の懐疑の対象とする。「幾何学の最も単純な問題についてはさえ、推理をもちがえぬ困難をおかす」ことがあるのだから、整合性が成立しているか、成立していないかを確定的に検証することは、必ずしも、可能ではない。デカルトは、このようにして、感覚が投げ捨てられたときに確実と思われた幾何学をも投げ捨ててしまふ。

彼は、前二者を投げ捨てたとき、感覚にもよらなければ推理にもよらない観念を彼の懐疑の対象とする。夢を、デカルトは、そのような観念を対象とするとき取り上げるが、その夢に對比されるのは一般的に考えられるような現実の生活ではない。夢が夢であるとされるのは、そのような現実の生活との対比によつてではなく、或る観念と他の観念との間に連続性が成立しないことから、一方が夢であるとされ、他方が現実の生活であるとされるにすぎない。自分の部屋で静寂の山頂にいる夢をみることができるように、そのような山頂で自分の部屋にいる夢をみることもできる。夢であるときされる観念は他の観念との比較によつて夢であるとされるように、現実の生活とされる観念もその観念自身によつて現実の生活とされるのではなく、各々がそれ自身で、絶対的に、夢または現実の生活であるとされるのではない。

デカルトが、幾何学を投げ捨てたときに、このような観念を彼の懐疑の対象とするのは、整合性を検証する働きがこの観念に基礎づけら

れているからである。幾何学における推理を検証する働きがその働き自身を対象とすることはできない。検証する働きは、とすれば、何によつてその妥当性を保証されるのか。それは、消去法によれば、感覚にもよらなければ推理にもよらない観念であるとされなければならない。整合性を検証する働きが、そのとき、基礎づけられるそのような観念は、さき言及したように、絶対的なものではない。夢は、一般的に、夢であることによつて偽であるとされるが、或る観念を、絶対的に、夢であるとすることはできないのだから、どの観念が偽であるのかを確定的に決定することはできない。整合性を検証する働きを基礎づけている観念も、このようにして、投げすてられてしまふ。

デカルトの懐疑が対象としている真理の領域における三種類の観念は、懐疑が適用されることによつて、そのすべてが投げすてられてしまつた。「すべては偽である」と、それでは、されなければならないのか。そうではない。デカルトは、彼の懐疑を極限にまですすめるとき、三種類の観念のすべてが投げすてられたときに、「私は考える、ゆえに私はある」が疑ふことのできない真理であることに気がつく。すべての観念が投げすてられてしまつた「精神」の虚空において、彼は、この真理に気がつくのだが、この真理はどのようにして把握されるのだろうか。

機能概念としてとらえることによつて、私は、方法を規定する二つの契機を指摘したが、投げすてなければならないとされた三種類の観念は作用をうけるものであつて、作用するものは、まだ、明らかにはされていない。デカルトの懐疑が徹底的であろうとするとき、「精神」の虚空においても凝視<sup>みつ</sup>める眼であろうとすると、彼の懐疑は、特定の対象を超えて、懐疑それ自身を支えている基盤、即ち作用するものの契機に気がつくのであり、一切を疑ふことがそこに、初めて、成立する。

「私は考える、ゆえに私はある」は、このように、論証の結果としてではなく、徹底的な懐疑の果てに懐疑の使用者が到達する、直覚的な、自我の存在についての自己認識であることが明らかにされるのであり、それは、よりの確には、自我の「存在」ではなく、「自我」の存在である。Je pense, donc je suis.ではなく、Moi qui pense, je suis.である。考えるものとしての、それは、「私の」自己認識であり、そのようなものとして「私が」存在することの自己認識であつて、この両者は区別されることができるところではなく、「私」、この「私が」の意識によつて結合されているのであり、それが“cogitor”存在する「私」としての「私が」考えることを主張する“cogitor”なのである。彼の懐疑を、徹底的に、方法として使用することによつて、デカルトは、これまで投げてきたすべての観念の背後にある懐疑の使用者、即ち「私」、「私が」の存在に気がつき、その自己認識、直覚的に、確実な第一原理としてとらえ、この第一原理をアレキメデ

スの点として、彼は、「私」の存在を位置づけるのであり、このような「condition」に基づく体系を、彼は、構築しようとするのである。

懐疑は、デカルトにとつては、彼の哲学体系がどこにおいて成立する確実な根拠を探求するとき、道具として、使用されている。それによって明らかになれる根拠は、どのようなにしても確実であることができるのか。体系は整合的であることによってそれ自身の確実性を主張することができる。体系の確実性は、どのようなとき、体系を成立させている根拠に依存している。体系はその全ての展開の内に、結局は、それ自身を成立させている根拠の或る側面を語るにすぎない。総合的な体系の確実性は、とすれば、その体系がそこにおいて成立する根拠の確実性に規定されることになる。デカルトの哲学体系の確実性は、そこから、彼の第一原理、即ち「cogito」の確実性に規定されると考えられる。体系を成立させている根拠は、だが、何によってその確実性が明らかにされるのか。それは何かに基づくことによって確実であるとされるのではない。そのような状況が可能であるとすれば、それは、もはや、体系の根拠、即ち第一原理ではありえないのだから。その根拠は、それ故に他の何かに基づいて、確実であるとされるのではなく、それ自身において、確実であるとされるのでなければならぬ。体系の根拠、即ち第一原理は単独でその確実性を主張するものでなければならぬ。それが他の何かに依存することは、その概念規定から、許されないのだから。第一原理が、そのとき、単独でそれ自身の確実性を主張することは自己主張としての独断以外のものではありえないとされなければならないのではないか。自己主張によって確実性が規定されるとすれば、それは恣意的にすぎることではないか。人は、このように、反論すると考えられるが、他の権威に依存して語ることを独断的、恣意的にすぎることと、そのとき、人は気づいていない。神の権威に依存して語ることは、信者にとつては敬虔であつても、異教徒にとつては独断以外のものではない。何故に神は確実であるのかと後者は問うが、前者のもつとも確実な答は確実な神があるとして、自己の信仰を表現することができるだけである。信者が成立する根拠、即ち第一原理としての神について神自身の確実性が議論の対象とされるとき、神の確実性を明らかにするのは、神が、即ち神の確実性が何を根拠としているのかを探求する論理ではなく、情熱と敬虔とをこめて告白する Credo……なのである。神について言及することによって、人が、自己の体系が成立する根拠の確実性を明らかにしてきたと考えるならば、神、即ち彼の体系の第一原理が単独でそれ自身の確実性を主張できることを、そのとき、承認している。何故に神だけが、とすれば、独断的、恣意的であることが許されるのか。神についての熱烈な信仰告白と恣意的なドクサとが連なる数千年の後に、その成果として、神は死んだと主張され、さらに、神はありはしなかつたと語られるのが現在の状況であり、神はもはや、信者がむける孤獨な情念以外のものを支配することはないのだから、神がそれ自身の確実性を自

己主張として規定するにすれば、他の体系の根拠、即ち第一原理が、やはり、それ自身の確実性を自己主張として規定できないとされなければならぬ理由はどこにもない。体系の根拠、即ち第一原理は、それだからどのようなものであっても、それ自身において確実であると言われるのでなければならぬ。神の確実性が何によつて主張されるかについて反省することなしに自己の体系の根拠、即ち第一原理は神との連関によつて確実であると主張するとき、人は、より悪く独斷的、恣意的である。体系の根拠、即ち第一原理への反省が徹底されてはいないのだから。

体系の根拠、即ち第一原理はそれ自身において確実であるとされなければならないことが明らかにされたとしても、構造を問う例によつての問が否定されなければならないとしても、どのような問うことは可能ではないのか。分析的な構造の記述はできないとしても、統一的、総合的な把握を記述することは可能ではないのか。他の何かに依存することによつて確実性が主張されるのではなく、自己主張によつて確実性が規定されるとき、何故に確実であるのかを明らかにする方法は分析ではなく総合であると考えられるのだから。或る何かを他の何かによつてではなくそれをそれとして把握する方法は総合であると考えられるのだから。体系の根拠、即ち第一原理を総合として把握する方法は致命的な失敗を運命づけられている。体系はその全ての展開の内、結局は、それ自身を成立させている根拠、即ち第一原理の或る側面を語るにすぎないように、体系の根拠、即ち第一原理もやはり、それによつて成立している体系の全ての展開において自己を主張しているのだから。体系とその根拠、即ち第一原理とは、このように、不可分な関係にあるのだから、後者だけを対象とすることはできない。体系の根拠、即ち第一原理の確実性を明らかにしようとするとき、人は体系全体を対象にしなければならぬ。体系の根拠、即ち第一原理と体系の全ての展開とを同時に対象とすることはできない。体系の根拠、即ち第一原理とそれの全ての展開とを同時に対象とすることは、こゝを換へれば、体系を対象とすることであり、両者を同時に対象とするのでなければそれ自身においての確実性を明らかにすることができないことから、そのような確実性は体系それ自身を総合として把握することによつて明らかにされるのでなければならぬ。或る体系の確実性は、それだから、その体系それ自身による自己主張として規定されることが帰結する。或る体系の確実性は、端的には、その体系の存在によつて規定されるのである。体系それ自身を総合として把握するとき、しかし、体系の根拠、即ち第一原理と体系の全ての展開との不可分な連関は、未だ、充分には解明されていない。体系それ自身を対象とすると

き、後者の前者に対する連関は依存、……によってとして明らかにされてはいるが、前者の後者に対する連関は明らかにはされていないのだから。体系の根拠、即ち第一原理はそれによって成立している体系の全ての展開において自己を主張していると、さきに、言及されたが、そのような状況を、さらに、明らかにしなければならない。体系の根拠、即ち第一原理は最も根底にあるものとして潜在であり、普遍である。それは最も単純化されたものであり、種々な表現の可能性を潜在させている。体系の根拠、即ち第一原理の内に、潜在的に、存在している種々な可能性は体系の全ての展開において顕在化されると考えられる。体系の全ての展開は、とすれば、種々な状況のなかで体系の根拠、即ち第一原理がその可能性をどこまで顕在化、具体化できるかを指示していると考えられ、体系の全ての展開は、また、その根拠、即ち第一原理に、潜在的に、内在している可能性の領域の広さを明らかにすると考えられる。体系の全ての展開はそれだから、体系の根拠、即ち第一原理が、そのように、それ自身をその究極にまで表現しようとすることによってその形を獲得するのであり、ことばを換えれば、後者の具体化、特殊化された結果である。体系の全ての展開と体系の根拠、即ち第一原理とは、それだから、直ちに一なのであり、一であるものとして体系が、両者の集合体としての体系が対象とされなければならない。或る体系の確実性はその体系の存在によって規定されると主張するとき、それは両者の集合体としての体系なのである。体系の確実性は、そこから視点を換えれば、体系の根拠、即ち第一原理をどれだけ広範な領域にまで展開することができるかの問題に、どこまでを体系化できるかの問題に帰結する。体系の確実性は、結局は、体系の根拠、即ち第一原理の自己主張可能な領域における確実性なのである。"cogito"から、デカルトは、どのような体系を導き出すのかを検討することなしには、とすれば、第一原理としての"coogito"の確実性を把握することはできない。"coogito"は、そうではあるが、体系の根拠として、単独で確実性を、或る程度は規定できるのではないかと考えられるが、それは、やはり、体系との連関において論ぜられなければならない問題と思われる。体系の根拠、即ち第一原理としての"coogito"を提出することだけでは不十分であると、人は、論駁することと思われるが、現在は導入部の提出ということで、ともかくを終了したい。